

最終レポート

放電精密加工研究所での研修の初日は朝の間は小田さんが同行し、南郷さんは終日サポート役としてあらゆることに対する理解を助けてくれた。

最初に研究所の施設の案内があった。機械 A 棟、手作業が主となる B 棟、電気の機器がある C 棟を見て回った。昼食後は、会議室で藤田さんと南郷さんとともに座り、社内規則や原理について話し合った。



外部サポート（南郷さん）無しの初めての日には、我々のコーチとして竹林さんとニシナさんが B 棟におけるすべての作業についての理解を助けてくれた。

私たちはまた、施設の使い方、食事代の支払いの仕方、衣服や安全危機についても説明を受けた。

その後何日間かは金属の表面の研磨（これがメインであり、様々な種類の商品に施す）、手動のフォークリフトでの運搬、養生テープの除去、角の保護の取り付け、梱包、そして工程には直接関係のない、日報の記入や清掃などのような基本作業に集中して取り組んだ。

始めの一週間は摂氏 80 から 343℃にもなるような炉の近くでする仕事がほとんどで、高温の場所で長い時間作業することに体を慣らすことが難しかった。それはとても大変だったが、耐えきることができた。

初めての週末は同じブラジルからの研修員である竹内さんと東京に行き、ブラジルの友人と富士登山をした。登山による大変な疲労と痛みを翌週まで持ち越してしまった。その状態を説明すると研究所のみなさんは理解を示してくれ、月曜日は軽作業を割り振り、研磨作業の間は椅子を用意してくれた。その後数日間は我々の体調、特に膝を痛めている私のことを心配してくれた。

研究所のみなさんは安全を第一に考えており、全職員の朝礼で毎日そのことについて確認している。最後は安全の規則と知識の強化で締めくくるのだ。特に、酷い怪我を防いでくれるが内側から徐々に痛くなってくる心地悪い安全靴ひとつとって見ても、彼らの安全への意識の高さは賞賛すべきである。

月末までには、あらゆる作業の練習を少しずつしたので、作業量はもはやそう厳しいものには見えなくなった。今では我々は練習のおかげで作業が速くなり、作業をさっと済ませて合間に休憩をとれるようなそつのない人材になれたと思う。我々は実際には、研修のみであるため他の職員と比べると作業時間は少ないのだが、ブラジルの場合と比べると、かなり多い（一日に 4 から 8 時間の作業が通常である）。

毎日午後 4 時には我々は会議室で藤田さんと会い、研修に関することから日本、ひいては日本の文化について胸の内にあることの全てを話している。

これまでのところ、私の見解としては、研修中ですらコーチや藤田さんとの何でもないような会話の中から日本文化について理解を深めることができるということである。色々と話してみることは、私が予想していたよりもはるかに生産的なのだ。



8月の第一週は午前中はB棟で作業し、午後からは藤田さんからA棟の機器についての案内、製造過程についての詳しい説明を受けた。私たちにはB棟での作業以外の仕事の詳しい事はまだ何一つわかっていないが、それでもその説明は非常に有益なものだった。

8月初めに会社から言われたように、私たちは会社から保温ボトルをプレゼントされ、ブラスト機を使って自分で考えたデザインをそのボトルに転写する作業をすることになった。研磨により転写するためのデザインを考え粘着シートを切り抜いた。



その後私たちはB棟での作業を続けてその流れが定着し、工場の製造過程に順応することができた。東京に観光に行ったお盆休暇までそれを順調にこなしていった。

旅行から帰ると普段通りに作業した。次の特別な作業の日は27日で、ブラスト室に入り保温ボトルに自分のデザインを転写するためブラスト機を使った。

8月28日の夜から29日にかけて呼吸が苦しくなり辛い夜を過ごした。私は藤田さんに連絡して回復するための休暇をもらった。藤田さんは深く理解を示してくれ、そのおかげで私は休養に専念することができ、幸いにも少し回復の兆しが見えてきたので病院に行かずに済み、次の日は出勤することができた。30日に仕事場に向かうとみんなが心配してくれており、放電精密加工研究所の人々のまさしくすてきな優しい人柄が垣間見えたのである。

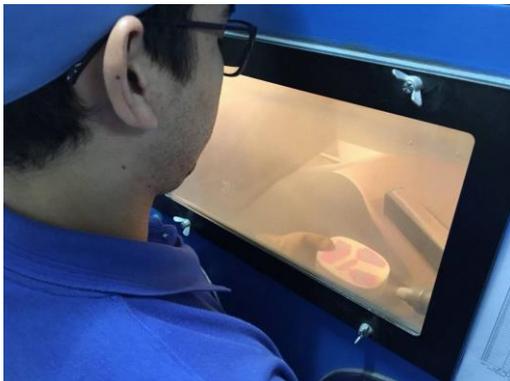


9月に入って研修作業について目新しいことはなかったが、前月に習ったことに自信を持つようになった。また、ちょっとした出来事もあった。通常週始め（月・火曜）は、需要がそれほど高くないため、さほどたくさんの作業がない。月の半ばに大きな発注があり、その後の数日間本当に忙しく過ごすことになったあの時までは、本当にそうだったのである。

おそらく今月もっとも特筆すべき出来事は、先月B棟でブラスト機を使ったときと同じように会社がプレゼント（カスタマイズできる弁当箱）をくれたことだ。今回の違いは、弁当箱に絵柄をつけるためのブラスト機の性能が、他のものより良い仕上がりにしてくれたことである。

その後、藤田さんからブラストの仕組みの理論の説明を受けた。ブラジルでの私の研究と相互に関連のある理論だったので、私は興味深く思った。

もう一つここで触れておくべきなのは、全ての作業において、できるだけスムーズに工程を進めるのに重要となる迅速さ、正確さのよりたくさんの進歩が、その商品の仕上がりの質を確かなものにすることに気付いたことだ。そして、そのことはおまけに仕事の合間の自由時間をさらに与えてくれることになった。その時間を私は専ら、掃除や仕事場の整理整頓に使った。



全体的に、提示されたさまざまな作業について、印象的なものは少なかったが、私はそこから多くを学んだのみならず大いに楽しんだ。ひとつの経験として（プロとして、また、いち個人として）それは大変価値があると言えるだろう。